

春はお遍路の季節

喜田 邦彦 陸白66

お遍路は春の季語。春になると、四国八十八カ所・歩き遍路を思い出す。5年前の浪人中、父母の生誕の地・香川を巡ることを思い立ち、札所八十八カ所を連続して歩き通すことにした。全行程約1200km、45日かけて回りきった。信心深い性格ではないので、札所での朱印集めに興味はなかった。

むしろ、「人間は1200kmもの距離を、毎日25km〜30kmのペースで歩き通すことができるのか？」という単純な疑問への挑戦だった。

佐原の伊能忠敬は、家督を譲った後に日本全国を測量して回った。近くは、日本軍兵士が大陸打通作戦で中国大陸を踏破している。

しかし今は、時代も、環境も、目的も違う。カネさえ出せば温かい風呂もあり、雨露を防ぐ遍路宿やビジネスポテルがある（といえど、土佐路は厳しかった）。特別の任務もないし、部下や連れ合いもいない。歩き疲れば、畑の脇で一休みできたし、何よりふらふらになった時に土地の人からお接待を受けた。鉛玉数個、文巨1個のあり

がたき、その温かさが励みになった。

八十八番の手前に「歩き遍路センター」があり、「遍路大使任命書を発行する」と言われたが、丁寧に断りした。完歩した証明であるが、巡礼・慰霊に真面目に取り組んでいなかったことが、引かなかった。「こんなものか」という気持ちも勝り、感動や達成感はありませんでした。

ご利益といえは、ご先祖の墓にお参りしたこと、秋の定期健康診断で医者から褒められたこと。「血圧・血糖値や、ガンマーGTP値が大きく下がりに、平均になりましたね」と言われた。45万円は高くないと思ったものだ。

春が近づくと、新聞やネットで「歩き遍路」の記事を探す。外国人が多くなったと日経新聞が伝えている（1月9日）。「歩き遍路センター」で、毎年3千人弱が歩き通すと聞いていた。外国人も増えて5%程度であり、若い女性が多いそうだ。携帯電話の活用で宿泊予約は簡単にできるし、山道もナビ（GPS）で確認できる。

ところが最近の外国人は、9%程度に上昇しているそうだ。国別では、米国が41人、フランスが36人、韓国が24人、次いでオーストラリア、台湾が続く。確かに5年前も、田舎の遍路道の表示には英語と韓国語が書かれていた。NPO法人の「遍路とおもてなし」

のネットワーク（本部・高松）も立ち上げられ、海外にも情報を積極的に発信している。外国人の歩き遍路には、宗教的な抵抗感が見られず、異国の地域に根ざした文化に触れたという思いが、チャレンジ精神をかきたてるらしい。

都会の観光地は、訪日外国人であふれているが、その波が地方にも波及している。歩き遍路は体験型であり、日本を知ろうとする敬虔な思いが伺える。そしてそれは、喧騒や歓声とは程遠い人生の哲学に通じる。

四国4県は、八十八カ所霊場と遍路道の世界遺産登録をめざしている。都市化が進み、鎮守の森が消えているが、まだまだ日本には奥の深い、精神的な遺産がたくさんある。

巡礼・お遍路に固執はない。今まで生きてきた来し方を振り返り、祖霊や^{やおよろず}やおよろずの神々に感謝し、若い世代に後を託すため、ヒマとカネと健康を四国の道場につき込んでみてはいかがでしょう。

